

---

# ツギハギ女

烏籠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツギハギ女

### 【Nコード】

N0718H

### 【作者名】

烏籠

### 【あらすじ】

犯行に使用された凶器や手袋、さらには被害者の遺体はすべて現場に残されている。誰もが「犯人はすぐに捕まる」と思っていた。しかし、事件は「迷宮入り」となったのだ……。これほど猟奇的な犯罪を犯した彼女が、なぜ捕まらなかったのか？えいち先生とのコラボ小説です。

## 第一話 『アンドロイド』（前書き）

全四話構成、毎日更新予定です。

## 第一話 『アンドロイド』

彼女の父親は天才だった。彼女が二十歳の誕生日の夜、父親から人造人間となる手術を受ける。それは彼女にとって全くの『寝耳に水』の出来事だった。

手術は心臓に握り拳ほどの大きさの『装置』を取り付けるだけ。それだけでその人間は頭を潰されようが、大量に出血しようが『死なない』身体となるのだ。

アンドロイドを殺す方法は、

- 1．心臓に取り付けられた『装置』を壊す、破壊する。
- 2．主の心臓の活動限界。つまり寿命を待つ。
- 3．もしくは電力を与えず『装置』が止まるのを待つ。

以上の3つの方法がある。なお、アンドロイドは食事から『装置』を動かすのに必要な電力を生み出し補給する。この辺りは人間と同じで、電力を断つには食事をさせなければ良い。

この画期的な『装置』は彼女の父親が独自に開発したものだ。しかしだからといって、何も知らない娘にその『装置』を取り付けることは人権を無視した行為であり、彼の行為は立派な犯罪である。

何も知らずにアンドロイドになる手術を終えた彼女。こうして彼女は、ほぼ不死の存在となった。そして狂った父親は彼女に対し、過酷な実験を始める……  
それは、

『アンドロイドはどの程度までは死なないのかをしる為の実験』

その実験は……正に地獄絵図だった!! 泣こうが叫ぼうが、父親は彼女への実験を止めなかった。

彼女は『いつそ殺して!』と何度も叫んだ。……腕を! 脚を! 切り刻まれ、焼かれ、時には気を失う程強烈な電流を浴びる……度重なる実験に、彼女の身体はボロボロになっていた。アンドロイドとはいえ、彼女には痛みも感情もある。そもそも父親だった彼女が、娘に対して改造・実験をする時点で気が狂っていると思えない

……

『いつか必ず殺される!』

そう思った彼女は着の身着のまま、逃げ出したのだった……

## 第二話 『嫌い』

とある廃工場、虚ろな瞳をした傷だらけの女性がいた。  
彼女は『彼女』が嫌いだった。

…\*…\*…\*…\*…\*…

私は『私』が嫌いだった。

あの男の娘のこの身体が大嫌い！ この指の長さも、形も火傷の  
あとも嫌い！！ 脚の長さも、太ももに残る裂傷も、大きな模様の  
ように残るアザも嫌い！！ 身体の傷はいずれ治る。しかし、なに  
よりもあの男の面影があるこの顔が大ツ嫌い！！ 私はあの男の  
実験材料。もしかしたらあの男が私を探しているかもしれない……  
もし捕まれば、今度こそ殺される！！

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ  
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ  
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ  
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ  
嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

絶対に嫌だ！！！！

気が狂いそうだ……気が狂ってしまっ！……もう耐えられない！！

「なんとかしなきゃ……」

整形する？ もし整形するなら、顔と身体を丸ごと全部だ。何も考えずに逃げ出した私は、そんな大金を持っていない。

なら諦める？ それはありえない！ できる、できないじゃなくて『やる』んだ。私にはやるしかない……

工場の壁にはめ込まれた鏡を見つけた。

所々割れているが、自分の姿を写すには充分だ。アンドロイドとなる手術を受けてから、初めて鏡を見た。『装置』に近い胴体は傷が少ない……たぶんあの男が装置を避けたのだ。まず『装置』から離れた部分から痛めつけ……最後に『装置』を潰す。それがあの男の『アンドロイド』はどの程度までは死なないのかを知る為の実験』

吐き気がする。『元』娘だった私に対し、よくこれほどことができるものだ……だが、怒りはあまり感じなかった。むしろ『二度とあの男に会いたくない』という恐怖の方が私の中では大きい。思い出しただけで全身が小刻みに震えるほど、私は心底あの男を恐れていた。

彼女は真剣に考える。あの男から逃れ、そして彼女が生まれ変わる方法……

小一時間経った頃……彼女が口を開き、何かを呟いた。……

その声は聞く者すべてに恐怖を与えるかのように冷たかった。

「そうだ……これなら私にもできる……」

大きく見開いた彼女の目には狂気が宿っていた。

第三話 『奪つ』 (前書き)

猟奇・グロテスク描写あり。

### 第三話 『奪う』

『私の新しい体』を集めないといけない。  
生まれ変わる為に、美しい体を。

…\*…\*…\*…\*…

「あの、事務所って本当にこっちなんですか？」

「ええ、もうすぐよ」

この子は私が芸能事務所の人間だと本気で思ってる。

街で見つけたその娘の半袖から伸びる、ほっそりとした白い腕。  
一目見て気に入った。

「芸能界に興味ない？」

そんなありきたりな文句で彼女を誘い、古びた廃工場まで連れ出した。

彼女の顔はアイドルになれるかもしれないという希望に満ちていた。

残念、……未来があるのはその腕だけよ。

「ねえ、本当にこっちなんですか？ただのボロ工場じゃないですか」  
「いいえ、ここがいいのよ」

ここまで連れてくればもうこっちのもの。小娘相手にはこれで十分ね。

がんツ！

後ろから、彼女の頭目掛けて金づちを振り下ろした。少女の体が不自然に傾き、倒れた。

ここには都合のいい道具が揃っている。解体作業も出来る。ちょっと骨が折れるかもしれないけど……

私は道具の中からノコギリを選び、少女の腕に宛がった。

……ギゴ、ギコツギコギコギゴ、ギコツ  
ブチイッ！

「はあっ、取れた……」

これよ、これだわ！

白く透きとおるような、滑らかな肌。ほっそりとした華奢な腕。

その先の細い五指。

ああ、なんて美しいんだろう……。。

私は自分の両腕も切り落とし、彼女の腕を無理やり自分に付けた。細胞の結合や、血液型などの大概の不自由は『装置』が解決してくれる。私の身体はどんな血液にも適合するし、感染症などの病気にもかからない。さらに外傷は常識外のスピードで治る。

無理やりくっ付けた腕も今はツギハギのようになっていているが、い

ずれは跡形もなくなってしまっただろう。

さあ、はやく集めないと。・・・残りの私の身体・・・

「きゃああああー!!」

廃工場に女の悲鳴が響き渡る。

柱にくくりつけられたその女は、必死の形相でもがきながら足をばたつかせた。

「もう、暴れないでよ！ 足に傷でもついたらどうするつもりっ！？」

傷なんかついてもすぐに治る。でもこれから自分のものになる足を傷つけられるのは許せない。

私はノコギリから一旦手を離し、傍に置いていた大振りのカッターを掴んだ。

「少しは大人しくしててよっ!!」

グサッ！

「きゃああああー!!」

頭上に縛り上げた腕にカッターの刃を突き立てると、女の口から面白いほど悲鳴が上がった。

「ごめんなさい、もう腕は必要ないの」

女の腕に刃を沈めたまま、私は手に力を込めてカッターを引いた。

ぎち、ぎちぎちぎちっぎちぎちぎちぎちぎちっ！

「うぐっ！ぎゃああああああー！」

ずぶっ、とカッターを引き抜き、私は再びノコギリに手を伸ばした。

「お・・・おねが、い・・・たすけてえ・・・」

女は涙を流しながら、私に懇願してきた。

そんな女に向かって、私は微笑んでみせた。女の顔が引き攣るよ  
うな、ぎこちない笑みを浮かべる。

「だめ。でも大丈夫、痛いのは今だけ。我慢しなさい」

女はいつの間にかこと切れていたようで、両足を切り落とした頃  
にはすでに動かなくなっていた。

「さあ、残るはあなただけよ」

そう言って私は後ろを振り返った。両手両足を縛られた女と目が  
合う。

「うう・・・ひどい。どうしてこんな事・・・」

女の中から涙が溢れ出る。散々泣き腫らし涙に濡れているにも関  
わらず、その顔の美しさが崩れる事はない。

やはり私の目に狂いはなかった。

「どうして？ 決まってるじゃない。新しい私を手に入れるためよ」

「新しい私・・・？ 何を言ってるの？」

「私は新しい体を手に入れる。そして生まれ変わるの・・・全てそのためよ」

「あなたが何を言ってるのかわからない・・・。自分のために他人を犠牲にするっていうの？あなたおかしいわ、狂ってる！」

違う！ 狂っているのは私の父親。私は被害者……

「五月蠅い！ その美しい顔は私がもらう」

女はノコギリを持って近づくと私に臆する事なく、睨みつけてくる。私はそれを嘲笑いながら、ノコギリを女の首筋に宛がい一気に切りつけた。

ぶしゅッ！

瞬間、溢れ出す鮮血。体に降りかかる温かい血を感じながら、私は恍惚の笑みを浮かべた。

「きゃあああ、  
っ！」

喪失。

声が出ない聞こえない、一切の音が消えた。

闇。奈落突き落とされたような感覚。

感覚？ そんなものあったのか？ ない。

何も無い。

目が、感覚が、耳が、見慣れた赤が、声が、鉄錆の匂いが、

無い無い無い無い無い無い無い無い無い無い無いなく  
なつた。

あ、

見つけた。

首、の上、

ここ？

乗せて、

あ、あ ああ

あ・・・

そして世界が変わった。音が、声が、目が、全てが蘇った。新し  
い体を手に入れた。ついに私はあの男から解放される。

「・・・つた、やった。あは、あはははははははっ！」

今はまだ、ツギハギだらけの体。でもいずれ綺麗になる。

「もうこれはいらない」

ついさっきまで『私の体だったもの』を見下ろしながらほくそ笑む。あとは後始末をすればおしまいだ。

私はあちこちに散らばった、壊れた人形のようになった足と腕。それらの指をひとつひとつライターの火で炙った。これで指紋は消える。

「こんなことをしても、警察はきつとすぐに身元を調べ上げるでしょうね……」

次に身分証の類の隠滅。私はそれぞれの遺体の持ち物全てを一ヶ所にまとめ、火をつけた。最後に殺した女の持ち物を除いて。

「でも、それでいい。私の身元を判らせて、最後の女の身元を判らせない……それが理想」

訳の分からないことをブツブツ呟きながら、彼女は廃工場から立ち去った。

## 最終話 『その後・・・』

狂った猟奇事件・・・彼女の犯行が発覚したのは、すべてが終わってから3日後のことだ。

犯行に使用された凶器や手袋、さらには被害者の遺体はすべて現場に残されている。誰もが『犯人はすぐに捕まる』と思っていた。しかし、事件は『迷宮入り』となったのだ・・・

これほど猟奇的な犯罪を犯した彼女が、なぜ捕まらなかったのか？

・・・\*・・・\*・・・\*・・・\*・・・\*

彼女はすべての犯行を終えた後、現場にすべての死体を残した。普通、殺人を犯したなら、死体が見つからないように隠すべきだろう。しかし、彼女の場合は『知らない死体を現場に残した』ことが功を奏した。

今回の猟奇事件を起こした彼女の望みは2つ。

1つ目は、他人の身体を奪うこと。

2つ目は、父親の追跡から逃れること。

・・・\*・・・\*・・・\*・・・\*・・・\*

「ふむ、仏さんは全部で4つか・・死体を見ると、『胴体』がない死体と『両腕』・『両脚』、そして『首から上』がない死体か。これらを合わせると、人の形になる。狂った人体収集家の犯行か？」

「その線が有力ですね。本部もその線で捜査を開始するみたいですよ」

「で、仏さん達の身元は？」

「今のところ、3つの遺体の身元は判別しました。」

2人はアイドルを夢見ていた女性。『胴体』がない死体の女性はなにかの研究者の1人娘でした。可哀想に……家族は酷く嘆いてましたよ。」

しかし、身分証など身元がわかりそうなものを一切所持していませんからね……もしかしたら最後の遺体の判別はつかないかもしれません」

「首から上が無いとなると、ニュースで顔写真を流せないか……だが、そのうち行方不明かなんかでリストに挙がるだろ？ DN Aやら血液型なんかで、鑑識のやつらが判別してくれるさ」

「遺体の身元は気長に待ちましようか。それよりも犯人逮捕が優先ですから」

「ああ、その通りだ！」

…\*…\*…\*…\*…\*…

彼女が現場にすべての死体を理由。それは、……

『彼女が殺害されたと警察に思わせるため』

警察は犯人が『胴体』さえあれば生きられるアンドロイドとは気づけなかった。

ならば、首から上を取られた女性の身元が判別できない限り、彼女は捕まらないだろう。

当然だが、首から上がない死体の身元が判れば、『成り変わった』彼女が捕まってしまふ。だから彼女にとっては、『成り変わった女性』の身元がわからなければそれでよかった。

しかし、もし『成り変わった女性』の身元だけ抹消すれば、警察は『なぜ首から上が無い死体だけ指紋を焼き、身分証を奪ったのか？』と疑うかもしれない。だからこそ彼女は、すべての死体を同じように指紋を焼き、身分証を抹消した。

最後に、警察が自分も被害者と思ひ込む事も、すべては彼女の計算通り。狂気の犯行が警察の目を曇らせた。

『胴体』がない死体……それが犯人の身体だとは誰も気付かない。こうして、彼女は新しい身体を手に入れ、過去の自分を殺すことに成功した。

美しい身体を手に入れ、警察の捜査網から……そして父親の追跡から……彼女は完全に逃れたのだ。

…\*…\*…\*…\*…

「おーい、幸子<sup>サチコ</sup>。出掛ける準備はできたか？」

「ええ、何時でもいいわよ。……ねえ、あなた…私って、キレイ？」

「うん。幸子は最高に綺麗だよ。俺は君みたいな人と結婚できて幸せだ！ さあ行こうか。晩御飯はレストランを予約してあるんだ！」

「それは楽しみね……私も今は幸せ……」

誰にも気づかれることなく……彼女は生きていく。

く終わりく

最終話 『その後・・・』 (後書き)

最後まで読んで頂きありがとうございました。よろしければ感想・評価して下さいと嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0718h/>

---

ツギハギ女

2010年10月9日18時36分発行